

成語と諺の日中対照研究—植物を使う事例を中心に

論文要旨

文学研究科国文学専攻 宋睿

成語や諺は、古くより民衆が実際生活の体験によって得た知恵や教訓などの結晶であり、内容が豊富でさまざまな生活知識を網羅している。その中には、民族の言語特性や文化のあり方も反映しているものもあると考えられる。

人と植物との関わりは歴史が長く、その過程において多種多様な植物に関する文化が各地で育まれてきた。東アジア文化圏での日常生活も密接に関わる植物に対して、人は様々な意味を付与してきた。日本と中国の関係については、よく「一衣帯水」と言われるが、文化的な面においても影響関係が多く見られる。例えば、同じ植物を指して用いられる日本語・中国語の語彙について、共通する面も多く認められる一方で、その植物に対する双方の認識が同一ではない場合も認められる。成語や諺という言語表現は、その国や地域の人々がどのようにものを考え、どのような生活をしてきたかを表す面があり、思想や文化の痕跡をとどめる一面も認められる。そのため、我々は成語や諺という文脈を通して、その地域の文化や認識、表現の特徴などについて、うかがい知ることができる。

本稿の考察対象は、日本語と中国語の植物に関する成語と諺である。考察方法としては、まず、日本語の成語の用例は『新明解 四字熟語辞典』と四字熟語辞典オンラインを資料とし、植物に関する成語を取り出す。一方、中国語の成語の用例は『中国成語大辞典』と『漢語成語源流大辞典』を主な参考資料とし、『新華成語大詞典』を補助資料として、植物を含む成語を収集する。また、日本語の諺の用例は『故事・俗信諺大辞典』を資料として、諺を取り出す。一方、中国語の諺は、『中国諺語大全』を中心に、諺の用例を取り出す。それから、日中両言語における植物成語と植物諺を整理し、両言語のそれぞれ諺の修辞的特徴、韻律的特徴、用語の選択、表現の方法表現などの方面について分析しながら、諺に現れる表現の特徴を見ていく。次に、日本語、中国語ともに植物諺の数が比較的多く見られる5つの植物を代表として取り上げ、具体的な用例を照らし合わせながら分析していく。お互いに各植物に対する認識はどのような共通点と相違点があるのかを確認した上で、各植物の比喩のあり方を論じて整理する。植物である本義から様々な転義となる過程で、どのような思考をたどったかを明らかにする。最後に、文化的な面から日中植物四字熟語と植物諺における相違点について考察を加え、差異を生じた社会文化的な要因をも探ってみたいと思う。全体は七章からなる。

第一章では、研究の目的、意義、対象と方法を明確にした上で、本研究の位置づけを示す。

第二章では、日中における成語と諺の定義から始め、成語と諺の分類を考察する。また、比喩表現に関する基本概念と先行研究をまとめる。

第三章では、日本語における成語と諺に関する研究、中国語における成語と諺に関する研究、さらに日中における成語と諺に関する対照研究を概観した上で、新しい研究の位置づけを試みる。

第四章では、まず、中国から日本に伝来した成語や諺について、日本に伝えられた後の意味、構造、用法の変容を分析した上、その変化の原因を検討する。次に、構造、表現の仕方、修辞、内容、韻律、用語の選択の面から、日中両言語の植物に関する諺における表現形式の対照考察を行う。さらに、以上の認識に基づき、両言語の植物に関する成語と諺の特徴を明らかにする。

第五章では、「桃」、「梨」、「竹」、「柳」、「梅」、「柿」、「桜」、「菊」、「茶」、「桐」、「桑」、「杏」、「槐」、「蘭」、「松」、「石榴」という16の植物を研究対象とし、日本語は『故事・俗信ことわざ大辞典』から、中国語は『中国諺語大全』からそれぞれの諺を収集し、日中両言語における植物に関する諺の数量の概況を整理する。その結果として、「茶」、「竹」、「桃」、「柳」、「梅」に関する諺の数は、日本語、中国語ともに比較的多く見られるため、この5つの植物を代表として取り上げ、具体的な事例を照らし合わせながら分析していく。まず、植物に関する日本語と中国語の成語や諺を取り上げ、植物に対する認識の共通点と相違点を探求していく。その上で、日中両言語における植物に対する本義から転義となる意味拡張の過程を明らかにする。最後に、文化的な面から、日中植物に関する認識の相違点についても考察を加える。

第六章では、第五章の「茶」、「竹」、「桃」、「柳」、「梅」についての事例研究を踏まえて、植物に関する成語や諺における相違点を生み出す要因について詳しく分析する。

第七章では、本研究から得られた結論をまとめ、今後の展望を論じる。本研究で得られた知見が、植物の比喩のあり方の解明を試み、日中認識の相違点と文化的要因を究明する研究に大きく貢献することが期待される。